

健全な河川水環境のあり方に関する懇談会  
議事要旨

日時：平成19年11月14日（水）10:00～12:00

場所：国土交通省（中央合同庁舎3号館）1階河川局A会議室

1. 懇談会設立趣旨及び議事の公開について

事務局より、「健全な河川水環境のあり方に関する懇談会設立趣旨」及び「健全な河川水環境のあり方に関する懇談会議事の公開等について」を説明し、了承を得た。

2. 河川水環境に関する現状等について

事務局より、河川行政の変遷と現状、河川環境・河川水質への取組、国民の健康に関する意識の高まりと水道水の安全性について説明した。さらに、オブザーバーとして参加した東京都水道局より、東京都の水道事業における河川水質の課題について説明した。

3. 意見

○河川水質は、水道原水の観点から見ると未だ不十分なレベルにある。

- ・河川の水質は今まで環境基準を評価のベースと考えられ、それによって今のかなり良い環境が出来上がってきた。水質環境基準の一つであるBOD75%値で見ると、河川水質はかなり優秀な改善がなされてきたことがわかる。一方で、未だ十分でないという認識もある。
- ・特に、水道水質の観点から見れば、アンモニア態窒素やトリハロメタン等の環境基準にはない項目について、必ずしも満足な水質となっていない。そして、これらの成分が水道事業者処理上の苦勞を強いており、安全でおいしい水の確保が脅かされている。

○安心の確立が重要である。

- ・安全と安心はセットで語られることが多いが、実は安全と安心とは全く異なる概念である。安全は技術で確立できるが安心は心の問題。技術的な観点からどれだけ安全であっても、安心と感じられる信頼感がなければ、住民からの評価は低い。行政機関内部の取組に終始せず、住民に充分理解を得られるようにすることが重要である。

○流量中心から水量・水質双方の低水管理へ転換すべきである。

- ・今まで河川管理者は流量の確保を中心とした低水管理を実施してきたが、従来以上に水質に注目し、水量・水質双方の管理へ転換すべきである。

○二元取水の実現も検討すべきである。

- ・複数の上水取水口の設置を認めるべきである。渇水時は水質の観点から必ずしも満足できない位置からの取水も仕方がないが、例えば、豊水時にはより上流の良質な水を取水できるようにすべきである。

○流域管理を目指す上で、河川管理者が関係機関の調整の場を提供すべきである。

- ・上水道や下水道の果たした役割、今後果たす役割は大きい。その一方で、上下水道は自治体等による管理であり、現在のままでは流域一体の管理をめざすために不十分である。取水元であり排水先である河川の管理者が流域全体の観点から調整をすることが求められる。
- ・河川管理者が場の提供を行い、水にかかわる様々な機関の意見・データを共有し、関係者が互いにアクセスし易い情報プラットフォームをつくるべき。

○各地域の特徴を踏まえた望ましい河川水環境の管理が必要である。

- ・河川の水環境を正しく診断する手順、方法論が必要である。
- ・水から受ける人々の便益は様々であり、関係機関も幅広い。水使用（農、工、上水）の用途別に必要な水質指標項目を見直し、必ずしも全国一律ではなく地域の実情とバランスをとりながら水質管理指標を設定する必要がある。
- ・流域全体の水域における物質の動きを的確に把握する必要がある。どこからどういうものが河川に流れてきているか、生物生産により臭いを出す物質がつけられるといった河川の中での変化がどのように起こっているか、どういう経路でどこへ流下しているかということを考えなければならない。
- ・元来の河川の姿を知ることが大切である。数百年前の年間の流況はどうだったのか。人間の活動がどれだけ川にひずみをもたらしているのか。人間の生活と環境とのバランスを前提に、どこまでひずみを押さえる必要があるのか。そのような点を把握検討するとともに、その上で地域に合った水質基準の設定について、全国で数河川を選定しモデル的に検討すべきである。

○生物の生息環境への影響も十分に考慮した管理が必要である。

- ・川を利用しているのは人間だけではない。人間の健康を重視すると同時に、生物の生息環境の視点からも適切な低水管理を実施することが重要である。例え

ば、イングランドでは上流に大きな水源となる山地が乏しく、下水の処理水が流量の大きな割合を占める河川があり、下水道では処理が困難な物質が原因となって、そこに住んでいる生物に悪影響を及ぼしている例がある。日本ではこのような問題はまだ顕然化していないが、十分に留意する必要がある。

#### ○水資源管理の観点も重要である。

- ・ 将来、世界の多くの人々が満足に水を飲むことができなくなる可能性があると言われていた中で、我が国は水道水をたっぷり使えるという非常に恵まれた状態にある。しかしながら、今後の気候変動等を考えるといつまでもそのようなぜいたくは許されないのではないかと感じている。もっと屋根に降った降水を貯めて敷地内でうまく使うというような有効利用を図っていくことが重要である。
- ・ 河川が元々持っている流量を確保していくことも必要である。特に、水資源の確保に懸念のある都市部では、河川の流量を減らさないように使用した水をうまく河川に戻し、なおかつ環境への影響を減らすといった、水資源管理の観点も重要である。

#### ○国民と関係各機関が特出した重要性を認めるような柱を据えて取り組むことが必要である。

- ・ 河川水環境を改善することに不満のある者はいないであろう。しかし、具体的な施策を実施するにあたっては、各々の利用者が各々の立場で、良質の水を十分な量確保したいと思うであろう。そこで調整が必要になるが、「これだけは絶対に必要な取り組みだ」と皆が認めるものを中心に据えて、具体論を進めることが望ましい。
- ・ 「安全でおいしい水の確保」はその柱となり得る視点であり、このような分かりやすく理解されやすい旗印を掲げることで、結果的にデータが集まり、費用の調整がなされるなどして、飲み水以外の価値、例えば生態系とのバランス等についても改善や最適化が図られていくという WIN-WIN の関係を築くことが重要である。

以上